中ノ口川と歩む進取の地　―南区の歴史―

蛇行する中ノ口川　新潟県教育委員会撮影

たんぼの下から発見された鎌倉時代の村々

南区は信濃川の東側の本流と西側の西川の流れに囲まれた、越後の「川中島」地域である。昭和58（1983）年8月、庄瀬地域において馬場屋敷遺跡の発掘が行われ、鎌倉時代の建物跡、呪い札・鑑札などの遺物が水田の下から多数出土した。これは従来の常識を覆す、豊かな中世の生活を雄弁に物語るものであった。

信濃川の沖積地に広がる「川中島」地域の村々は、近年の発掘と神社に残る伝承などから、洪水や地震等の災害により、断続的に興廃を繰り返していた様子がうかがえる。その一方で茨曽根などでは、戦国時代には掘り上げ田などの技術を用いて新たな開発を進め、上杉氏の蔵入地の役割を果たしていた。

鎌倉時代の住居跡（馬場屋敷遺跡下層）

中ノ口川の開削と新田開発の展開

南区域では中ノ口川を挟んで同じ地名が見られ、新発田藩と村上藩の領地の村々が並存していた。南区の中心を流れる中ノ口川は、信濃川の自然流路を用いて戦国末期から近世初期に整備されたと考えられる。

新発田藩による治水工事の結果、白根郷では新田開発が進み、寛文年間（1661～1672）には現在の村がほぼ成立した。近世中期以降、白蓮潟・大潟・道潟をはじめとする低湿地とその周辺部が干拓され、さらに笠巻川の締切や信濃川の直流化工事などを経て、白根郷には豊かな耕地が広がっていった。

「新発田領内絵図」（白根郷部分）
新発田市立図書館所蔵　新潟県立図書館提供

川を下り、村を開く

国重要文化財旧笹川家住宅の当主であった笹川氏は、信濃国水内郡笹川村（飯山市）から味方の地に移住したと伝わり、慶安2（1649）年ころには村上藩の大庄屋となって、300年以上続いた名家である。

中ノ口川の西岸には、多数の浄土真宗寺院があり、北信濃や北陸地方からやってきたという由緒を持っている。戦国末期から近世初頭に一族郎党とともに、海を越え川を下ってやってきた真宗門徒たちは、越後の低湿地に根付いて新たな村を開き、「真宗王国新潟」を形成する一翼を担った。

笹川邸母屋（国重要文化財）

果樹栽培王国の形成過程

南区域は信濃川・中ノ口川の氾濫により稲作が不安定であった。そこで、江戸時代中期ころから、肥沃（ひよく）だが荒れ地が多かった堤外地にモモ・ナシを植えると、土壌との相性がよく作柄が良好だったため、盛んに栽培されるようになった。

大別当（おおべっとう）（月潟地区）には、洪水による転作を契機として、文化年間（1804～1818）に上総国（千葉県）から梨苗を取り寄せたという樹齢 200 年になる「類産（るいさん）」ナシ（国の天然記念物）がある。

明治期以降も果樹の生産量は増加し、ナシ・モモ・ブドウなどの一大生産地となったが、その背景には、黒星（くろぼし）病などの病害の克服とたゆまぬ栽培技術の向上があった。

特産品のル レクチェ　広報課提供

また、現在新潟を代表するかつて幻の洋ナシといわれた「ル レクチェ」は、明治後期にこの地域で栽培が始まった。

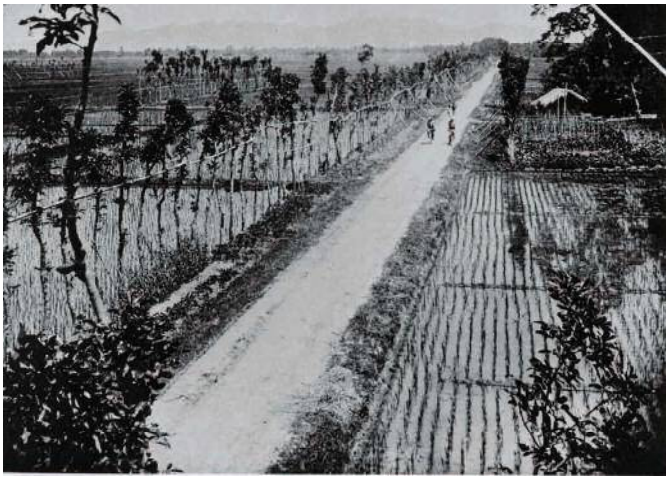
類産ナシ（国天然記念物）

耕地整理の先進地白根郷

白根郷では、明治期から基幹排水路の流末に動力排水機を設置するなど、積極的な治水事業を進めていた。しかし、大正11（1922）年の大河津分水の通水により、信濃川では用水不足が予測された。

新潟県内では、県営第１号の事業として白根郷用水改良事業が行われ、各地の揚水機を改築し、整備された用排水路系統を活用して耕地整理を行った。

地主層が主導したこの耕地整理は、当時全国最大級の事業であったため注目を集めた。白根郷では戦中戦後も土地改良事業を継続し、市域ではいち早く湿田を乾田化することに成功して、水稲生産の先進地と評価されるようになった。



耕地整理後の白根郷　昭和14（1939）年頃
白根郷土地改良区所蔵

川蒸気から自動車・電車交通へ

南区域では江戸時代以来、信濃川・中ノ口川の舟運が発達していたが、明治期になると川蒸気船が就航し、主要な交通手段として活躍した。大正期になると道路整備が進み、大正９（1920）年には乗合自動車が新潟～白根間に登場した。白根からは矢代田・巻・三条・燕・漆山などを結ぶ路線が発達し、陸上交通の要となった。

昭和２（1927）年、大河津分水自在堰の陥没により中ノ口川の水位が低下し、川蒸気船が航行不能になると、中ノ口川に沿って電気鉄道を建設する動きが促進され、同８年に新潟と白根、そして燕を結ぶ新潟電鉄が開通した。これらには、その時代の最先端の交通を導入した進取の地域性が見える。

「新潟電鉄沿線案内」新潟電鉄路線図